



第15号

栃木県書道連盟
 会報
 第15号
 編集 宇都宮市元今泉1-17-8
 TEL (0286) 33-4063
 振替口座 00340-3-9017
 〒321 宇都宮市築瀬1-14-15
 (会計) 増淵春雪
 TEL (0286) 35-3321
 印刷 宮本印刷

書道連盟のこと

会長 白石宙和

わが書道連盟も近々五十周年を迎えることになる。顧みてこれまで築いてこられたそれぞれの時代の方々のご盡力に新たな敬意を表したい。初期の斎藤松雲氏・葭田真齋氏・川俣古舟氏・大橋尚洞氏・石川木魚氏更に高橋日儔氏・七海水明氏へとつづくその時々周囲の若い力があつたことを忘れてはならない。初代の松雲氏の創生の苦勞、それを受けての真齋氏の基盤作りの献身的な活動、更に当時の日賀野東華氏や宮下竹洞氏の熱心強力な支えは初期の段階において実に重要な意義をもつものと思われるのである。現在、行われて

いる連盟の年中行事の一部もこの頃に徐々に固まっていたものである。会員展は、最も古い行事である。又、実技講習会も早期からの行事の一つである。当時としては国内一流の講師を招いているので関係者はかなりの骨折りであったと考えられる。当時の会員の年会費がいくらであったかは記憶にない程なので大変なやり繰りを余儀なくされたのではないかと思われる。最近になって日中交流や研修旅行や女流展などが実施されるようになって、それぞれの成果をあげていると思う。更に近年になって篆刻人口が急に増え作品展もよ

く開かれ、徐々に質の向上が見られることはうれしいことである。往年の本県篆刻会はずかに田野琢洞氏の名が知られる程度で外に名を聞かない。戦後、新井幽秋先生が東京からかえられて、新しい篆刻の灯がともされたと云えよう。その後各地に結社が出来、中央で学ぶ人も多くなっていたようである。又、書の社中展も各地で頻繁に行われるようになり活気を感じるものであるが、中には師風の追隨すらかなわず塾風に止まるものも見えるようになった。古い伝統がいつか活力を失った結果であろうか。連盟が間もなく五十周年を迎えるに当たり立ち停まってもう一度、考えてみる必要性はないだろうか。そして更に将来への大きな展望を企したいものである。

平成七年度事業計画

◇会員展

平成七年五月二〇日(土)

二十三日(火)

県総合文化センター

第三・第四ギャラリー

批評会講師

赤平泰処先生(貞香会)

◇総会

平成七年五月二十一日(日)

ホテル丸治

◇一泊研修会

平成七年七月二十三日(日)

二十四日(月)

山梨県 大門碑林公園

山梨県立美術館

和紙工場等見学

◇実技講習会

平成八年二月予定

◇女流展

平成八年二月二十三日(金)

二十五日(日)

県総合文化センター

第四ギャラリー

平成六年度(第45回)

栃木県書道連盟会員展

批評会

会期 平成六年五月十九日～二十二日

会場 栃木県総合文化センター第三・四ギャラリー

批評会講師 須藤 黄謙先生

(謙慎書道会常任理事・読売書法会理事・猗園文会)

(文責、大谷津)

(講師のあいさつ) 昨日、ひとまわり見学させていただき今朝も再び拝見しました。いろいろな作風が妍を競っている。技術的にすぐれている作、未熟ながら一所懸命書いた作、どちらもいい所がある。未熟であってもいいものを見のささないで見えてきた。五十音順になっているようで、一つの方法だと思う。三点、連盟賞として選出、いろいろな見方があるので私の見方を聞いてほしい。

(田名網 萬静氏) 曹全碑、よく出来ている。これでいい。基本的によく出来ている。地味な作風、大きなものにしてゆくといい。(高橋 竹瑞氏) 細目の線でさらっと明るい感じ。字間の空間さわやか、風にゆられる感じでている。地味な作、大会場では損だが、

しっかりしていい。詩、読みやすくした落ち着いたいい作品。(高橋 爽西氏) 生などころはあるが、若さあり。堂々と前向きで書いてゆくといい。(武井 喜美氏) 滲み、かすれ考えて書いている。一行目の書き出し、通っている。二行目の「風」弱い。「に」右に、最後「身」いい。(竹澤 麗舟氏) 流れでている。やりすぎたところあり、「し」の長さどうするか、二行目の上、豊かしい。下、まあまあ、流れありすっきりしている。このやり方でいい。字をどうするか考えたらいい。(館沼 天游氏) 元氣すぎて土俵の外にでた。落款、本文につきすぎ、本文はおおきすぎ、余白を残して落款を。大小の文字を極端にやらないように。「欄」三字分ありすぎる。「絃」

長くひっぱらないように。(津久井 汀舟氏) 四角に三字、難しい。普通は避けて通る。ねじふせて三字、落款、考えて作った作と思った。四字無難、腕がないと書けない。苦心の作。(釣巻 大雲氏) 全体明るさありほっとする作。濃墨を苦心している。ころしている。手嶋 右卿の流れか、さわやかなところをふやしていくといい。個々の字、全体のもたまり散漫、まとめすぎてもかくなる。(豊田 典舟氏) 墨が濃すぎる、しこってしまった。「颯」さらっと払うこと。しこって固まった、それをとりのぞくように。一旦解放してさあっと書くといい。(中田 婦美氏) 字配りこれでもいいが、変化をつけてほしい。立派、まとまりすぎた。デフォルメ、どうする





か。一気に書くように牽制、重い。素晴らしくなるデザインをやってほしい。(中津原 軒陽氏) なぜ小さいのか、こ

れなりのいいものだ。立派、ここに飾っておくのがおしい。「巧」の右、目方ありいい。「若」「拙」熟していておかし

くない。いい作品だ。(西脇 紫竹氏) 半切、筆を大分巧みに使っている。「華」の縦画うますぎる。「落」少し上に、「落」の、重い、ひっかけて下につづくといい。最終画長く下まで引っぱっていくといい。(日賀野 琢氏) 大分書いている。力はこもってきしたが、腕、節で書いた若い力、結構、横に平たい字、それでもいいが縦の表現も考えたら豊かなになる。前後のつながりがしっくりいくといい。今後の研究課題だ。(福田 弘子氏) おだやか、やさしい感じ、鄭道昭か。丸味、形でている。細目でやっているがもう少し太めにしてふところを大きくゆったりと組みあげると明るい作になる。(古橋 洋舟氏) 女性とは見えない豪快さ、禅僧の気分だ。筆の腹を使いすぎ、「看」の字、一つのいき方として誰もやっていない。(北條 正浩氏) 濃墨、かなり勉強している。細い線目立つ。作品の厚みを考えてもう少しくふうを。(本多 雨情氏) 細かく書きこんでいる。変化あり、書きぐせ、固定、安心してみられる。多少行の足に変化をつけるといい。(増渕 春雪氏) 豪快、造形にくふう

を。始めの書き出しがいい。旁、おしい。墨色澄んでいてよい。最後、おしい。(水沼 龍峰氏) 一行目、くさっとしてつまってしまった。二、三行目にあわない。二行目中心的存在、三行目ぐくしゃくばらばら、調和してない。二行目の調子でまとめたらい。(村上 千津子氏) おおらか、いい作品、明るい。白さわか、一寸弱いところあり。「満」細い線ださないように。(矢古宇 栖洞氏) 相当筆になれていて面白くやろうとしている。「書」「娛」かまえ、いいが、「図」かまえ大きすぎ、バランス問題だ。全体的にいい。(山口 英子氏) 全体の構成、面白い、すっきりしている。「隠」ぼさっとしている。「君」小さい、かぶくは広く。(山下 スミ氏) 頑張っている。はみ出し、土俵の中で表現した方がいい。「曉」の最終重い、出だしあげた方がいい。(山本 紫苑氏) 筆をいじめた。息苦しい。これを解放した方がいい、広がるように。中心によりすぎ、字をていねいに。「覚」よみやすく、はっきりと、なかなかしまっていていい。省略しすぎないように。(横田 雅

子氏) 全体的に面白い。側筆、文字がわかるように書いて、よく出来るといい。(吉田 景堂氏) 面白い、よく出来ている。「梅」いい、神経を使っている。払い方、翠軒のよさがよくでている。大ききありいい。(齋藤 笙風氏) 明るくいい作品、余白いい。字が浮きあがり呼びかけている。ほのぼの、豊かさありいい。(白石 宙和氏) 禅坊主の書、書法をつきぬけたよさ。老成の芸術、二字目「沈」さわやかでている。(重原 聖鳥氏) 隸書、面白い。才気、木訥、豊かさでている。波磔、目立たない隸書、彷彿とさせる。「鳳」いい。隸の真髄を表現している。(中井 史朗氏) 高度なもの、手嶋先生を思い出す。情感の豊かさ、扁旁の潤渇との調和、豊かさ感じられる。弟子は師匠に似るなあとと思う。始めのにじみで決まっている。いい雰囲気をもしだしている。(吉田 竹溪氏) まとまりいい持ち味、なめらかさがでたらいい作になる。下があきすぎ。(吉田 芝更氏) やわらかい感じ、木刻のやわらかさでている。布字調和していい。(吉田 典生氏) 若い、通っていていい。

少しかたい、金属的、並べ方をくふうすると豊かな作になる。(渡邊 竹亭氏) 真面目、一所懸命書いている。お習字になってしまふ。形はこれで出来ている。表現法をもってゆくように。(渡辺 燁子氏) 左の扁、軽い、最終画面白い。戈つながるように。(渡辺 登水氏) 通っている少し弱い、縦の線はがっちり。(石川 善克氏) 西川流、楷書の行書、楷書あり全体のバランスいい。(小倉 龍雲氏) 一所懸命書いている。一字一字ちんでいる。紙一杯に大きくときほぐすとい。(原口 深月氏) 面白さあり、散漫だ。中心にまとまるといい。しめたらいい。(塚原 知子氏) 真面目でいい。虞 世南風の書か、作品としては難しい。他のもので、めりはりを付けて書くとい。(中村 礼子氏) 元氣いい作、迷いでいる。「一」さりげなく、言葉いいが惜しい。「素」の頭、重い。下とのつりあいどうするか、気をつけるといい。(長橋 榮峰氏) 四行までしっかりいっているが、あとは流してしまった。全体を左に寄せるか、全体のバランス、一考を。(渡辺 柳翁氏) 迫力

あり、「郭」の縦いい、全体に起筆弱い。(村田 幽香氏) 長鋒でこなして書いている。縦の線、難しい。目的は達成している。上はつまっても下に余白を。(齋藤 一吼氏) 調和のとれた作、派手でなく、落ち着いた作、最後の線めけてしまった。とめるか、掉尾をかざる。(矢野 弓翠氏) 面白い作、半切二字無理、下までさがるように。表現上惜しい。(藤沼 順風氏) 隷書、上と下、あきすぎ、さびしい。紙一杯に書くとい、横画長く。(穂山 玉星氏) 筆、立っていい、書きなれている。相当な力あり。全体調和よくとれている。落款いい、きゅっとしまったところあれば、もっとよかった。(赤澤 豊氏) いい作、一、二行よく通っていてよく読める、いい。墨の潤いいい、言うところなし。(新井 彩玉氏) 筆がもつれ、かたい。四字程度で書くとい。真中に書くとい。(荒井 雅子氏) 全体的にひらきすぎ、真中、求心的にするとよかった。構成が問題。(新井 幽秋氏) すっきりしている、きちんと整っている。くだけたところがでたらしい。(新井 幽石氏) 筆、こねすぎ、

すっきりと引いたらいい。こすりつけすぎた。(荒牧 桂舟氏) 北魏調、迫力あり。最終部、あぶらがのってきた。打ちこみを鋭く、「三」いい。全体の調子を考えて。(石川 澄子氏) おさまりのいい、なすりつけすぎ、「如」の口、つぶれた、おしい。「淡」いい。落款いい。(岩澤 松濤氏) 一所懸命書きすぎ。どの字もうまく書こうとしている。連絡の表現、課題だ。(及川 紫峰氏) 「曉」いい。一気に書いた迫力、「光」さわやかさ、いい。一字目さわがしい。一部省略するとい。墨色、あまり濃くするとまずい。(大島 静彩氏) 隷書、書きこむと良くなる。この勉強でいい。(大出 真司氏) 素直、大きな字に挑戦するとい。(大塚 清岳氏) 書きなれている。白の部、いい。字の崩し方、「夏」一画、まづい。中の部いい。(大谷津 紫水氏) 墨、ねばりすぎた。紙引っぱられた。「墨」を右に、「戲」戈法いい。(大谷津 芥舟氏) 墨が濃い、やわらかい筆、細い線ださない方がいい。一字目「龍」つぶれた。(嘉久和 尚道氏) 「真」どうにかしないと構成上問題だ。(太田



初穂氏) 素直、墨を少し濃く。元気がでた。落款の字間の空間つめて。(柏崎 柏園氏) こあじ、大きく豊かさを。張猛龍風。(神尾 嘉茜氏) や

わらかさ、いい。書きこんでゆけばよくなる。いい感じの作。(川合 義山氏) 全体的に洒落ていい。書きぶりそつなく書いている。(川口

青芳氏) 一所懸命書いている。つめすぎ、書きすぎ、「鍵」重い。(木曾 梅邦氏) 面白いが字がわかる程度にしたらしい。(乙川 玄洞氏) 一寸つまった、二字がいい。(菊地 継舟氏) 一字ずつ、ていねいにかいているがまとまりがない。縦、長い画を生かしてほしい。文字の大小の変化を。(久津美 碧洋氏) 光っている作品、細い線が弱く目ざわりになっている。極端に細い線はださない方がいい。(倉澤 竹邨氏) 面白い、右よりすぎ、左、豊か、右苦しい。(倉持 玄風氏) 章法いい。作ったかなあと感じ、整理するといいい。全体的にいい。(下司 香雪氏) 字が多すぎ、二字ぐらい減らすといいい、筆立っていい。(黒須 圭助氏) 字、面白い。下部あきすぎ。紙に対し表現をくふうするといいい。(兼目 悠久氏) 「邪」の線、「誠」の縦線、弱い。気が通っていないとだめ。(癸生川 天遊氏) 全体的にまとまっている。かたまりすぎ、散らすといいい、表現豊かになる。まとまりいいが変化が少なく。(小滝 きみ氏) 下がかすかになりすぎ、細い線はいいが細すぎ。「きりぎりす」

見えるように。(小林 正韻氏) 紙に対し文字がちぢんでしまった。余白多すぎ。(小森 聖子氏) いろいろの字がまじってしまった。呼吸をつなげてゆくよう。(後藤 春鐘氏) 思い切って書いていてよい。少しつますぎ、「清風」。(郷間 大悠氏) まとまりはある。うまく書こうとする意識あり。流してリズムにのせて書くように。(齋藤 美与子氏) いい作品、「愚」を少しあげたらよかった。しまった。(酒井 導子氏) 明るい作品、最後下げたらよかった。四行目、一寸下げるとよかった。いい作。(坂本 翠専氏) つこんだ強さ乏しい。ちぢまないで、ぱっと。(篠原 松情氏) 横画、王鐸を意識しすぎ、まとまりすぎ、きれいな王鐸になってしまった。用筆うまい。(白井 郁江氏) 「随」のへ、すなおに大きくかまえるといいい。(島田 雄泉氏) 洒落た感じ。自分のものを作り出すように、他のものをとり入れて変化をつけるといい。うまく明るい先が見えてしまった感じ。(菅谷 宝真氏) 北魏調、がっちり書いている。字はこれでいい、一字つめてゆくと響いてくる。

(鈴木 清氏) 墨薄い、印象弱い。(鈴木 源泉氏) さわやかさあり、作品としてはよくまとまっている。これからどう展開してゆくか、形、つまみを。(鈴木 光峰氏) 筆よく動いている。まとまりある。厚みを、豊かになる。(鈴木 小菟氏) 真面目、一寸筆かたい、ほぐすように。前後の関係をリズムにのって書くように。(関口 恵琴氏) 全体にぼーっといった。大きいところ、つぶれたところ、つまったところがでたらもって面白くなる。これでいいか、表現をどのようにするか、原稿を作ること。(住谷 恵水氏) 興味ひかれた作品。清水比庵の書に似ている。立派だ。(鈴木 博味氏) 切れ味、いい。どれも同じ、めりはりをもう一つつけて、字そのものはいいい。(関 平峰氏) おさまり、空間あきすぎ、つくらないように。落款、真すぐ素直に。草体、字書をひきよく確認すること。読める字を、明るく素直に。(佐藤 紫香氏) 元気あっている。野放図な感じ。「し」、短かく、「潮」を右によせて。落款うまい。(齋藤 松峰氏) 一字ずつ丹念に書いているが古い感じ。

じ。字をつめすぎたからか。四行にしては字数、多すぎ、落款小さく。(齋藤 星舟氏) かたまり、前と後にできた。

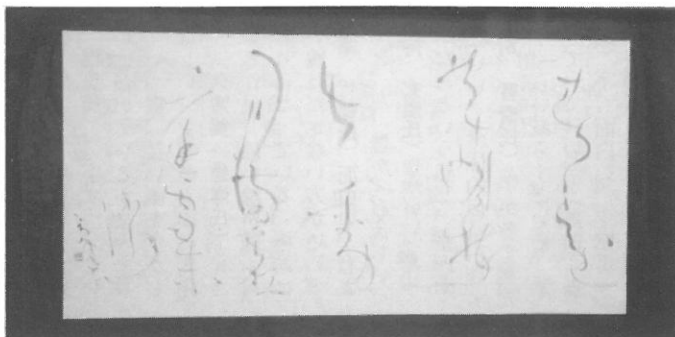
線がしこってしまった。斜めの線、やりすぎ。二行目の「希」縦線自然に。明るさいい。



連盟古舟賞

連盟賞を受賞して

吉田 景堂

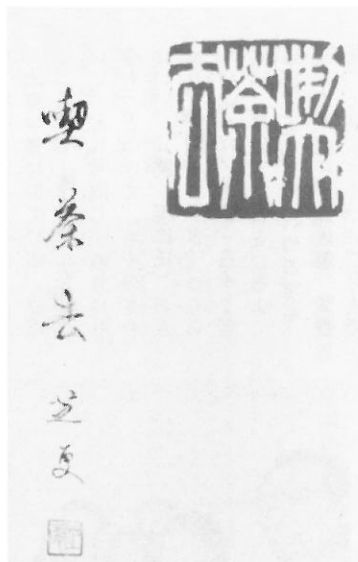


この度は、名誉ある栃木県書道連盟賞を賜り、まことに有難うございました。これもひとえに須藤先生はじめ書道連盟諸先生の日頃の温かいご指導のおかげと深く感謝申し上げます。

これからも明るい書の表現を心掛けるとともに、微力ではありますが、書道連盟のお役に立てますよう努力してまいりたいと存じますので、今後ともよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

連盟賞を戴いて

吉田 芝更



思いも掛けないおしらせを戴き身に余る光栄でございます。書道の大作的傍で怯えも見せず並んでいる手の平にも満たない篆刻。「その紅白の世界の秘密は何だろう」と。踏み込んでもう二十三年もの歳月が立ちました。然し未だ一人立ちも叶わず霧の中をさまよっている有様です。

「一日の師は一生の親」とか。師の経験に裏付けされた深い貴重な言葉を大切に、又先輩の助言を真摯な態度で受けとめて精進して参ります。連盟の先生方には種々有意義なプランや準備等お骨折りを頂き、そのご苦労の上に私の様な稚い作品を展示させて頂ける事を感謝しております。此度は本當に有難うございました。

連盟賞を受賞して

日賀 野 琢

このたび、若輩非才な私が、会員展連盟古舟賞をいただきました。驚きと感激の思いに満ちています。これもひとえに審査ご講評にあたられたました須藤黄謙先生をはじめ、連盟の先生方のおかげによるものと心より感謝申し上げます。今回の作は、数年来研究を続けております戦国楚帛書の偏平な篆書体のスタイルを基調としながら、半切という縦形式に重厚感を狙ってまとめたものです。自分自身が過不足なく表出できればと考えておりますが、書という相手は恐ろしくなかなか思うようになりません。今後ともよろしくご指導お願い申し上げます。ありがとうございます。



石飛博光先生をお迎えしての 実技講習会

吉田 景堂

平成六年度の実技講習会は、去る二月十九日（日）、県総合文化センターにおいて、金子鷗亭先生門の逸材、石飛博光先生をお迎えして行われた。先生は昭和16年生の54歳、既に日展で二度の特選を受賞されると共に「北海道生ビール」等のラベル揮毫者としても知られている。そ

の若々しいお姿と颯爽たる筆さばき、加えてユーモアと温かさに富む情熱的語り口が参加者一同を大いに魅了した。会場満員の受講者は閉会まで席を立つ者もなく真剣に筆をとり耳を傾け、指導者と受講者双方の気と情熱が満ち溢れた素晴らしい会となった。

テーマは漢字仮名交じりの書の制作についてである。講義された内容は次のとおりである。

最近、誰にでも読める書の作品の研究をという提唱がしばしばなされるが、このことはかつて金子鷗亭先生が発表されておき、漢字仮名交じりこそが現代の書表現にピッタリ合っている。この追究発表が課題であるが、この難しい点は、漢字・仮名の互いに異なる両特性をどう調和させまとめ上げている。

くかということにある。その例として、漢字に相応しい仮名を書くために古典の中から学び応用させていく方法を挙げられた。

具体的には四つの方法を示されたが、例えば、木簡の用筆や構成を工夫して仮名に取り入れたり、温泉銘の書き下し文を漢字の調子に合わせて書いたり、逆に高野切や関戸本を書きながらその風に漢字も表現してみるなどである。基礎は古典であり、そこから美的要素や筆づかいの要領を学んでいくべきであると説かれた。

そのような勉強法を実際に午前中は木簡の臨書をとおして示範された。先生は書法の大切な心得として次のことを強調された。腕は大きく動かし、肘で腕全体で体で書く事が大切だ。生きた線を書くのが書の基本であり、それにはいつたん壊れるのを恐れず体全体で生きた線で空間を切りながら表現に取り組めと。

午後はいろは歌、温泉銘である。とにかく書かれる。おそらく先生は書作が好きで好きでたまらないのであろうと思う。書けば書くほど境



に入り、体と書の表現が一体となって気迫がほとばしる。書いても書いても疲れを見せず、筆が体の一部となり踊りを舞うが如き、まさに歌舞伎の名優を観るようであった。

実作に加えもう一つ、先生の偉大さは人を導く力にある。受講者とのやりとりの中で書き手の不足を瞬時に判断され、巧みな話術と適切な指導で人の心を捉える。自然にもっと教えて欲しいと誰



ものが慕う。卓抜した指導力と感嘆せざるにはいられない。
最後に受講者の作品を揭示し構成法の観点から批評された後、これからは誰にでも読める書を、体ごと生きた線を、リズムある生き生きとした書を書いて欲しいと述べられ講習を締めくくられた。

先生の温かなお人柄と場内の明るい雰囲気と熱気、そしてプロの本格的な書作の醍醐味を堪能し、爽やかな余韻に浸った感動的な講習会であった。

第10回国民文化祭・とちぎ 出品のご案内

国民文化祭は、昭和六一年から全国各地で、各種の文化活動を行っている美術・音楽・演劇・伝統・芸能・文芸など日頃の文化活動の成果を全国的な規模で一堂に会し相互に競演、交流、発表することを通じて、芸術文化活動への参加の拡大と新しい芸術文化の創造、各地域の特色ある文化の発展を期待して、文化庁・開催県共催で開催され、栃木県開催は十回の節目を迎えます。

親しむ人々の作品を公募・展示することにより、とちぎから美のメッセージを全国に送ります。

○主催者

文化庁 栃木県
県教育委員会 宇都宮市
第十回国民文化祭栃木県実行委員会

○応募規定

1 応募点数 一人一点
2 作品規格
漢字・かな・漢字かな交り文
篆刻・刻字・前衛

(a) 242 cm × 61 cm 以内(縦のみ)
(b) 170 cm × 85 cm 以内(縦のみ)
(c) 61 cm × 182 cm 以内(縦横自由)
(d) 90 cm × 90 cm 以内
(e) 39 cm × 30 cm 以内(篆刻縦のみ)
○応募作品は額装又は枠装。
ガラス及びアクリル不可。
○重さが15 kg 以内、未発表のもの

○趣旨

とちぎ95美術展作品募集要項
日頃から美術の創作活動に

○搬入期間及び場所

九月三日(日)～九月五日(火)
県総合文化センター内

「美術展」書道係

○搬出

十一月六日(月)～八日(水)
県総合文化センター

○審査員

金子聴松 小山やす子
戸田提山 成瀬映山 梅舒適

○賞

文部大臣奨励賞 国民文化祭
実行委員会会長賞 知事賞他

○展示

十月二十七日(金)～十一月五日(日)
福田屋ショッピングプラザ
宇都宮店

○問い合わせ先

宇都宮市本町九一四
県庁南第二別館内

国民文化祭栃木県実行委員会
TEL 〇二八六二三二五〇七

会員はもちろん、門人、知人への出品への格別の御尽力をいただき、十回展にふさわしい書道展が開催できますようお願いいたします。

(重原聖鳥)

第四十八回県芸術祭

七 海 水 明

平成元年（一九八九）度書道部門の出品数は三百八十点、昨年は三百九十三点、今年は四百八十八点、まことに明るい前途の兆しを感じる。一点でも多く入選をと思ったが、展示壁面を考えると大変難しい。このことは美術部門全体の悩みである。入選率五五％あたりをふまえての審査となった。入選二百二十一点、内訳は漢字多字数百四十五点、漢字少字数（四字一文字）十八点、かな十六点、近代詩文十七点、篆刻二十五点。毎年このことが漢字多字数が圧倒的に多い。俗称に「ばち（二尺八寸）」の寸法の額に、三行、四行、五行と書きこんでゆくのである。その数は入選百四十五点中百点となる。どこに魅力がある

のかと思う人もあるようだ。時代の流れと解する方もある。複雑な自己の心をその腕、筆先にそして紙と墨との和を図りながらもものにしてゆく努力はすばらしいものがある。

気になるのはかなである。出品数昨年の四十四点から二十九点となり、その入選が十六点というのはどういうことか。小さな古典文字の美しさを大きく拡大しただけでは表現し得ないとも考えられる。言わば漢字っぽいかなの表現に大きなむずかしさを感じているようだ。大字かなへの挑みを切望する。

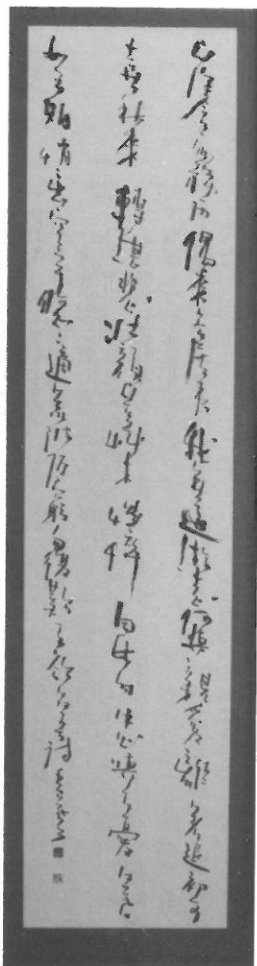
近代詩文は三十三点中の十七点。その究め方に二つがあるようだ。一は一字一字丹念に濃墨で静かに筆を運ぶ。空

間の筆意を見逃しては不可という。他は明快なタッチと快いリズムに乗っていった具合のものである。どう展開してゆくか、楽しみである。何を書くかでは自分の詩とかことばの方がピッタリの表現が出るのではなからうか。

少字数書は入選十八点。どういうわけか不振といわざるを得ない。

さて残るは篆刻。方寸の世界（使用する石が小さいことから生まれたもの）に生きるのだという意気盛んな人たちの仕事である。出品四十八点、入選二十五点の好成績、その裾は広い。先頭に立つ人たちの確かな方向づけと実践に大きな期待をかけた。

芸と名のつく仕事では、特に個性が強調されている。私たちの仕事では、どのように展開されていくべきかをこの機会に逸せず、深い深い反省と意思を固めてゆくべきであろう。



○芸術祭賞、山中香葉氏（小山市）「秋日山中」快適な作風の一語に尽きる。名馬のゴール直前の自信ある疾走を思わせる筆さばきの見事さがある。

「軼出」の作と賞することも出来る。「まだまだです」との本人のことばが耳に残る。

○準芸術祭賞、久津美碧洋氏（宇都宮市）「愈祭の詩」昨年の作とはかなり趣をかねて内容にふさわしい連綿の型をとった。ややもすると縦の流れにのみ心を惹かれ易いものだが、横への程よい張りを見せているあたりかなり余裕ある心境である。豊潤の作と言える。

○準芸術祭賞、酒井導子氏（大田原市）「田中冬二詩」さびしい谷間ではあったが、蜜蜂の群れとのくらしはどうであったかの疑問をこの書によって解けたか、どうかは別としてこの作の試みに賛同が多かったことは事実である。まことに明快清澄である。この分野でのさきがけとしての活躍を期待する。

○奨励賞、島田雄泉氏（宇都宮市）「王維の詩」出品作品中の最多字数であろう。読みにくい文字もあったので釈文との照合その正誤を確かめたが無事。長文を一気にものしただけの努力はもちろん、その筆の

さばきは見事で高く評価された。

○奨励賞、日賀野琢氏（宇都宮市）篆書「游雲驚龍」線の確かさと小字数における白と黒とによる余白を考え、驚の馬を面白く生かしている。一般には少し解りにくい表現となり、人の心を引きつける力に乏しかったようである。

○奨励賞、磯 翠茗氏（矢板市）「夏蟲疑冰」篆書の刻である。文字の大小、各字にみる余白のとり方、線の太さの変化をごく自然の姿におき、加えて刀のさばきに危うさが見られない。下に書かれた文の筆さばきはさすがの声があった。

○奨励賞、竹沢麗舟氏（宇都宮市）「西行の歌」散らし方の妙が眼を奪った。ここが見せ場というところを正確におさえ、こきみのよい風趣を存分に表現し得た。小字大字の中間にあるこの種のかなは非常にむずかしいものである。

○奨励賞、兼目悠久氏（鹿沼市）「送三藏帰西城」昨年とはかなり異なった味を見せ、個性が出てきたといえる。各字の構成にふところの広さがあり、筆はこびのリズムが非常に楽しい。特に中央の行の流れがすばらしい。

第十二回女流展

会期 平成七年二月十七日～十九日

県総合文化センターギャラリー



今回より文化センター内の飾り付けの方法が従来の釘打ちを止め、あらかじめ壁に用意された金具にワイヤーで取りつける方法に変わりました。やり始めると効率良く見た目にも整然ときれいに飾り付けが出来ました。古典よりの展開、創作、師風のこだわり

り等、女流会員二百七十名中出品者百十七名、意欲的に取りくんだ作品が多く活気にあふれた充実した展示となりました。黒と白のコントラストの中で多彩な色、香り、匂いを感じ取っていたかったです。初日(十七日)初めての親睦パーティーが文化センター内のオーベルジュで午後四時より、来賓の知事夫人外六名・招待者二十六名・出品者四十三名の参加で実現。知事夫人より、栃木県女流展の意識向上の高さと質に大変驚かれ今後共頑張って欲しいとの励ましのお言葉を賜りました。又松島堂様・宇台額縁店様より賞品を協力提供していただき、お楽しみとして、抽選を行い、思いがけない贈り物に大いに盛り上がり親睦を深めました。

今回は初日にパーティー、最終日に書道連盟の実技講習会が同じ文化センター内三階でありましたので、初日より沢山の参観者があり大変賑わいました。最終日には作った目録も全部なくなり参観者に渡せない失礼もあり申し訳ないやらうれしいやらでした。実技講習会の講師で石飛博光先生が時間の合間に女流展を一巡され、予定にはなかった事です希望者には心良く批評して下さい、気さくに会員と親しく言葉を交わされ、恐縮いたしました。石飛先生の人間性にとっても魅力を感じたひとときでした。

会期中に会員希望の申し込みや問い合わせがあり、女流展の成果として更に充実発展して行く過程で一番大きな収穫ではないかと喜ばしい限りです。

沢山の方々に支えられ、応援していただいた第十二回女流展、成功のうちで終ることが出来ました。

御協力を賜った皆様様に心より感謝申し上げます。

村田幽香記



平成六年度会務報告

平成六年

五	五	六	六	七
一九〇二	二二	二四	二七	一七
会員展 栃木県文化センター第三・四ギャラリー 出品点数二五六点（前年度より二八点増） 会員展批評会 講師 須藤黄謙先生（謙慎書道会） 参加 一〇一名（個人評は前頁に掲載） 連盟古舟賞 日賀野琢氏・吉田景堂氏・吉田芝更氏 総会 会場 ホテル丸治 出席者 一三〇名 議長 佐藤堪氏 議事 (1)平成五年度会務・会計報告 (2)平成六年度事業計画・予算案審議 (3)役員改選 会長 白石宙和 副会長重原聖鳥・齋藤生風留任 (4)規約改正 平成六年五月二二日施行	懇親会 出席者九〇名 下野の書展代表者会議 下野新聞社にて四時から 第一九回 下野の書展運営について 第一回幹事会 出席者九名 平成六年度事業計画を協議 ○県芸入選者のつどいについて○実技講習会について ○女流展について ○会員展について ○幹事の役割について ○参与会について ○五〇周年記念について（平成九年）○会員展の曜日について 第一回運営委員会 ホテル丸治 出席者三一名 幹事会での協議事項を中心に協議 ○会員展の曜日検討 木金土日↓金土日・土日月火 ○平成九年書道連盟五〇周年記念事業検討委員 重原聖鳥・酒井真沙・上野鶴陽・久津美碧洋・赤澤豊 ○批評会の時間検討 ○会員展出品料の検討			

八	九	十	十	十二	二	二	四	四	五
一八〇三	二八	二〇二	二〇二	二	一九	二七	一〇	一六	八
第一九回下野の書展 会場 東武宇都宮百貨店五階催事場 下野代表作家 二六名 下野選抜作家 一八九名 選考委員 酒井真沙・白石宙和・田島芳甲・佐藤堪・赤澤豊 下野書展賞 川合義山・五江潤霊水・鈴木源泉 県芸審査会（詳細別記） 審査員 七海永峰・酒井真沙・重原聖鳥・百目鬼賢 松本宜響・鈴木源泉 公募数 四〇八名 入賞八名 入選二二三名 入選率五四・二％ 運営委員 七海永峰 専門委員 中井史朗・重原聖鳥 実行委員 増淵春雪・上野鶴陽・大浦舟人・吉田景堂・赤澤豊 第四八回県芸祭美術展 書道・日本画・写真 県総合文化センターギャラリー 県芸祭祭入選者のつどい 四時からホテル丸治 参加者 一六一名 盛会 第二回幹事会 出席者 八名 ○実技講習会・女流展について	第十二回女流展（詳細別記） 県総合文化センター第四ギャラリー 出品点数 一一六名 批評会 今回もなし パーティー 七五名（招待含む）オーベルジュにて 実技講習会（詳細別記） 会場 県総合文化センター第一会議室 十時～十二時 講師 石飛博光先生（創玄書道会） 内容 木簡・温泉銘の臨書と近代詩文書 参加者 一三四名 懇親会参加者五一名 連盟会報打合せ 六名 五〇周年記念事業打合せ 六名 原案作成 総会前の幹事会 出席者十二名 会員展・総会・批評会の役割について 第二回運営委員会 ホテル丸治 出席者三〇名 ○平成六年度事業報告 ○平成七年度事業案審議 ○平成九年五〇周年記念事業案説明 参与会 ホテル丸治 十一名								

平成七年

平成6年度 決算報告書

□収入の部

	予 算	実績予算	備 考
会費収入	2,600,000	2,532,000	5,000×520名→492名・4,000×18名
利息		11,300	
繰越損失	△123,657		
計	2,476,343	2,543,300	

□支出の部

項 目	予 算	支 出	増 減	備 考
総 会	150,000	130,865	19,135	
展覧会				
会 員 展	450,000	466,443	△16,443	会場費・謝金・印刷・その他
女 流 展	160,000	172,811	△12,811	会場費・印刷・その他
会 議				
顧問・参与会	60,000	60,296	△296	
運営委員会	130,000	140,985	△10,985	2 回
幹 事 会	200,000	196,909	3,091	4 回
研 修				
実技講習会	360,000	368,119	△8,119	会場費・謝金・その他
50周年記念積立金	150,000	150,000	0	平成6年度より
会 報	180,000	162,843	17,157	
通信印刷	500,000	491,708	8,292	
雑 費	50,000	91,500	△41,500	
予 備 費	210,000	123,657	86,343	前年度繰越損失
合 計	2,600,000	2,556,136	43,864	

□決 算

収 入	支 出	小 計
2,543,300	2,556,136	△12,836
		△68,000 会費未収入分

計

△12,836 (来年度繰越分)

平成7年度 予 算 案

□収入の部

前年度繰越

2,700,000 円 (5,000 × 540名)

△12,836 円

□支出の部

総 会	150,000
展覧会	
会 員 展	470,000
女 流 展	170,000
会 議	
顧問・参与会	100,000
運営委員会	140,000
幹 事 会	200,000
研 修	
実技講習会	370,000
研修旅行	100,000
50周年記念積立金	150,000
会 報	150,000
通信印刷	500,000
雑 費	100,000
予 備 費	100,000
計	2,700,000

お 願 い

■連盟の年会費は同封の郵便振替用紙でお振込み下さい。その際、振替受領書を領収書とさせていただきますので保管して下さい。

■連盟に新入会の場合は年会費五〇〇〇円に入会申込書を必ず添えて、事務局または会計にご送金下さい。次年度からは郵便振替送金となります。

編集後記

平成六年度の事業も皆様の御蔭をもちまして大変充実し、しかも盛会裏に終わることができました。また各先生方にはご多忙のところ玉稿をお寄せいただきまして誠にありがとうございました。お蔭様で第十五号会報がお届けできるはこびとなりました。

平成七年度の事業計画も役員一同検討しておりますので皆様のご協力をお願い致します。

編 集 係

大谷 津 紫 水
久津 美 碧 洋
癸生 川 天 遊
吉田 景 堂
赤澤 豊